



# 頼りになるのは

## FP・深田晶恵さんと学ぶセミナー

朝日新聞Reライフプロジェクトの会員コミュニティ「Reライフ読者会議」は7月、「病気のお金をテーマにした少人数でのセミナーを朝日新聞東京本社で開きました。ファイナンシャルプランナー（FP）と一緒に学ぶ形式で、参加者からは「不安なのは自分だけじゃないと知って安心した」といった声が寄せられました。（南宏美）

### 高額療養 健康保険の制度でカバー



ふかた・あきえ 1967年生まれ。ファイナンシャルプランナー（CFP・1級FP技能士）。メーカー勤務を経て96年にFP資格を取得。特定の金融機関に属さず、「生活設計塾クルー」（東京）で個人の相談に応じるほか、メディア出演や講演、執筆を通じてマネー情報を発信している。

講師はFPの深田晶恵さん。若い世代のマイホーム購入に関する相談から、中高年による子どもの教育費や老後資金への不安など、約26年間、幅広い相談に応じてきた。

セミナー冒頭、参加者に「病気になったときに（経済的に）頼れるのは貯蓄？ それとも民間の医療保険？」と質問を投げかけた。深田さんの答えは、そのいずれでもなかった。「実は一番頼りになるのは健康保険（公的医療保険）です」

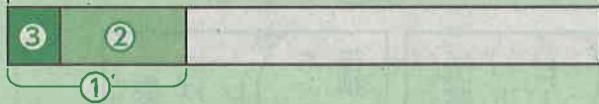
その理由は「高額療養費制度」があるから。

同制度は、ある月に医療機関や薬局で支払った自己負担額が上限額を超えた場合、申請すれば超過分が後で払い戻される仕組み。上

#### 高額療養費制度の例

●70歳未満 年収約370万～770万円、3割負担の場合

1カ月の医療費の総額100万円（10割）



- ① 30万円（3割）を医療機関で支払う
- ② 後日払い戻し 21万2570円
- ③ 自己負担額 48万7430円 食事代や差額ベッド代などが別途かかる

上限額の計算式（1～3回目）  
 $8万1000円 + (医療費 - 26万7000円) \times 1\%$

#### 病気のお金 素朴な疑問

**公的保険の対象外の差額ベッド代はどれくらいかかる？**  
 金額は病院によって開きがある。「治療上の必要がある」など、病院側の判断で個室に入る場合は、患者側が差額ベッド代を払わなくてよい

**民間保険の「先進医療特約」を付けていれば安心？**  
 「先進医療特約」は厚生労働省が定める先進医療が対象。「公的保険の適用外のすべての治療」が対象と誤解している人も多い。誰にでも必要とまでは言えない

FPの深田晶恵さんへの取材から

限額は所得や年齢で異なる。例えば、70歳未満で年収約370万～770万円の人の場合、医療費が100万円かかったとする

を活用すれば、自己負担の上限は8万7430円で済むため、後日、21万2570円が戻ってくる。  
 また、上限額を超える月が過去12カ月以内に4回以上あると、4回目から上限額は4万4400円に下がる。長期に治療する人の負担を軽減する仕組みだ。  
 そのうえで深田さんは治療費が高額になりそうな病気になったらすぐにすべきこととして、「限度額適用認定証」の取得を勧めた。医療機関でこの認定証を提示すると、窓口で自己負担分の全額をいったん支払う必要がなく、高額療養費制度の上限額の支払いだけで済む。

「年金生活者などは一時的な立て替え払いでも大きな負担になることがある。ぜひ準備してほしい」と深田さん。限度額適用認定証は加入する健康保険で入手できる。国民健康保険なら市区町村が窓口だ。

深田さんが健康保険の次に経済的に頼りになるとして挙げたのは、「貯蓄と自分や家族の収入」。民間の医療保険は3番目という。その理由について「民間の医療保険のほとんどは、入院や手術の費用をカバーするもの。一方、国は医療費を抑えるため、なるべく入院日数を短くしており、通院治療の費用が増えているから」と説明した。

# Reライフ

LIFE  
人生充実

www.asahi.com/relife/

## 「病気のお金」



深田晶恵さんの講演を聞いたり質問したりする参加者—いずれも篠塚ようこ撮影

### 「民間保険で対応」4割 「貯蓄で賄う」3割

どちらが安心？ 見積もりが大切

セミナー応募者に実施したアンケートで「医療費にどう備えているか」を尋ねたところ、「民間の医療保険」と答えた人が4割で最も多く、3割は「貯蓄」と答えた。

民間保険で備えると同答した人たちからは「がんの手術費用をすべて賄えた」（神奈川県、80代男性）や、「過去に複数回の手術で大変助けられた」（東京、80代男性）という実体験が届いた。「万が一の高額な医療費のために保険に入っている」（東京、60代男性）という人もいた。

一方、貯蓄派からは「高齢になったら公的保険と貯蓄で賄える範囲の治療でいい」（埼玉、60代女性）や、「保険でカバーできるか不安。貯蓄の方が安心」（東京、60代女性）、「家計を見直し、医療保険は全て解約した」（埼玉、60代女性）との声があった。

参加した埼玉県の60代女性は質疑応答で、自身が加入していた民間保険の保険料を計算したうえで、貯蓄で対応できると判断し、保険を解約したことを紹介。「その考え方でよかったですか」と助言を求めた。

深田さんは「自分で計算してこれくらいの貯蓄があれば医療費の備えは大丈夫と判断したのは素晴らしい。保険の解約は間違っていないかったのでは」。ほかの参加者にも「自分や家族の高額療養費制度の限度額を知り、もし1年治療を続けたらどうなるかを」と話した。

見積もって確かめることが大切とアドバイスした。

東京都の70代女性は「高齢になると化学療法をカバーする保険はなくてもいいですか」と質問した。

深田さんは、自身が7年前に乳がんと診断され治療を受けたときの心境の変化を紹介。「乳がんになるまでは抗がん剤で具合が悪くなつて死ぬのではという思い込みがあった。病気がわかり、勉強すると抗がん剤をした方が後悔しないと思った」と振り返った。「抗がん剤も様々で、医療は進化していくので、（治療に対する）心持ちは病気になつてみないとわからない。保険料が安いなら続けてみては」と話した。

日常の中に「もうひとつの時間」を。

慌ただしい毎日でもほんの少し、星を見る、本を読む、散歩をする、など「違う時間」を持つといい。

加藤

登紀子の

ひらり一言

